

アーティストインタビュー

小濱昭博さん

—自己紹介をお願いします。

小濱：仙台で俳優と演出をやっております、小濱昭博と言います。所属は、劇団短距離男道ミサイルと、自分で演出をやる時はチェルノゼムっていう名前です。あとはなんか、若手育成支援みたいなこととかで、C.T.T.仙台とか若伊達とか、最近だと週末演劇ひろばっていうのを始めたりしています。

—ありがとうございます。

小濱：で、生い立ちから話すと、たぶん、元々人間が怖かったんだと思うんですよ。っていうのは、ちょっと思い返して、幼少時に脳裏に焼き付いている出来事を何個か話すと。4人兄弟の末っ子で、で、親が結構、頭のいい家庭だったというか。大学の先生と学校の先生の間で生まれて。で、一番上の兄貴が僕の12歳上、一番近くても5歳上。だから、だいたい何でも答えが外側にあるっていうか、「これこれこうだと思ってる」。「違うよ。こうだよ」みたいな。圧倒的な正解が上の世代が持っていたなっていう中で、自発的に何かするっていうことがすごくあんまりなかったなっていうことと。覚えていることとしては、おやじがなんか、一時期 NASA に出向して働いていた時があるんですよ。で、アメリカに付いてって、幼稚園も全然英語とかしゃべれないまま幼稚園に行って。覚えているのが、滑り台の取り合いをして女の子に突き飛ばされたことと、あと2階に住んでいたイラン人の小6の男の子がいるんですけど、その子が、アメリカのマンションみたいなところだからプール付いてるんですよ。プールで泳いでた時に、イエローモンキーみたいな感じで捕まって、足捕まえられてじゃぶじゃぶじゃぶじゃぶさせられたんですよ。幼稚園の時に。マジで泣きながら帰って布団から出てこないみたいなことがその時あって、もうとにかく日本帰りたい帰りたい、人間怖いみたいになったのと、あと、幼稚園で絵を描いてた時にですね、これ日本なんですけど、僕は白く見えてたから、白く描いたら、ほかのみんなが赤で描くんですよ。で、すごい「変だよ、そんなの」って。「燃えてるから赤だよ」「変だよ」って言われて。でも白に見えるのに、「え、白じゃないの？」み

たいな感じで、見えてるもの違うんだっていうのがめちゃめちゃ怖い経験としてあったなと思います。

で、それで小学校になって。人とどう付き合っていくか分かんなかったんですよ。はい。で、足速い子はさ、足速い子は人気あるんです。頭いい子は頭いい子で、なんかそういう一目置かれるじゃないですか。って思った時に、頭そこそこいいけど、めちゃめちゃいいほうじゃないし、運動はむしろできたかと言ったら、家の中では「これ食いな」「これ食いな」ってされてどンドンちょっとポツチャリして。なんかこう居場所に困って、めちゃめちゃいろんなキャラを演じたのを覚えてますね。金持ちキャラ風に振る舞ってみたり、最終的にいろいろなをやって落ち着いたのが、気持ち悪いのを見てぐるぐる喜ぶキャラっていう。広島の写真とか見て「うふ！ いいね」みたいなことを言ったら、なんかみんなが反応してくれたんですよ。そのキャラで落ち着きましたね。もう。それででも、先生に怒られて。広島などで喜ぶとは何事か。それでショックを受けて泣いてとか、よく分からないキャラに。だから、情緒不安定な小・中学生を過ごしてましたね。

で、中学校に入ったら、荒れてたんですよ。なんか先輩の、ズボン下げて、ふっとい人たちが。なぜか来て。入学したてのガラガラって開けてみんなこうやって見ていくみたいな。そこで目を付けられたり付けられなかったりみたいなところで、そこで怯えながら。で、僕もおバカだったんで、先輩いるじゃないですか、廊下にいるじゃないですか。で、なんか番長っぽい小学校の時の先輩後輩関係がそのまま中学校でもできて、「お前何やってんの？」みたいな言われて話しているところに、俺はめちゃめちゃ怖いな、見られないためにどうしたらいいんだと思ったら、テンパった状態だったので、扉を閉じれば良いと思って。ぼねのようにガラガラピシャンと閉じちゃったみたいで。それでちょっと目を付けられてしまって。とか、ですかね。あとその時代、山形でいじめ自殺とかがあったりして、いじめによる殺人か。怖かったんですよ。っていうので、いじめられないためにはどうしたらいいんだっていう、ヤンキーグループにちょっとすり寄ってパシリみたいなことしてみようかなとか。なんかそんな感じで。必死で過ごしているうちに、もうもうこんなこんな。もう卒業写真とかもうすごい顔してるんですけど、暗黒時代ですね。っていうようなあれを過ごして。だから、ちゃんと話せる友達とかいなかったと思いますね。中学校。

で、高校で学院っていう、なんか、一番頭いい子が行く学校の滑り止めみたい

な。進学校の私立に入って。心のどこかで、友達がほしいとか、裏切らない友達がほしいなとか、ずっと思って大学に入ります。

で、大学が、なんか偶然入ったんですよ。

友達が欲しい。裏切らない友達が欲しいって言って、大学生だった兄貴に、「人間関係の濃い部活って何だろうか」って聞いて、「演劇部は濃いらしいぞ」って言われて、「よし、演劇部だ」と思って、演劇部に入りました。っていう、そこからですね。楽しかったですね。演劇部は。

—大学を卒業して、普通であればそこで就職と演劇の道とかって、そういう選んでいくみたいなのところがあると思うんだけど、じゃあそこからの話を。

小濱：大学6年で卒業して23歳か。で、卒業して就活するかとかってなった時に、もう俺は俳優1本でやっていくんだみたいなことをなぜか思ってて。なんか謎の自信と共に。でもどうしようかなって悩んでたんですね。在学中に、劇団航海記っていう今もある劇団なんですけど、そこが旗揚げするっていうので、そこはうちの大学のOBOGが結構関わって。で、外部でもやってみたいということ先輩に言った時に、うちの旗揚げ公演に出てみないかみたいな感じになって、旗揚げ公演に出て、その次の公演に出たけど、これは何やってるか分かんねえなって言って辞めることになって。で、ただそこで、ちょっと聞きかじった情報だと、なんかギユウさんっていう、ちょっとちゃんとした人がいるらしいとか、そういうのがあって。で、その当時、たぶん演出者工房っていうのをたしかギユウさんとかがやってて、なんか定期的に稽古みたいなのを若干やってたんだと思うんですよ。そこに電話か何か分かんないけど、なんらかの方法で問い合わせに来てみなよって言われて行って、そこでたぶん初めてギユウさんと会ったと思いますね。

大河原：何年ですか？

小濱：たぶんね、卒業、2007年、2008年とかたぶんそんぐらい。僕2008年に卒業してるんで。そこで、そういうギユウさんとかに顔を合わせた時に、今度プロの養成所を作るんだと言われて、「え、マジっすか」つって、初年度なんだけど来てみたらと言われて、じゃ行きますって言って、よし、決まったやることっ

てなって、卒業し、仙台座俳優養成所というところに、牛タン屋でバイトしながらおカネ払いつつ通うってことになりました。1年間。で、1年後、クビになって、11人ぐらいいて、俺だけクビになったんですよね。で、なるほどと思って、じゃあどうすっかなって思った時に、その時、ちょっと仙台の演劇界にちょっと詳しくなっていたんで、三角フラスコというのがある。あそこはちゃんとツアーにも行っている。制作さんがしっかりしている。なんか制作さんがしっかりしてないところはダメじゃないかみたいなことをちょっと思っていたので、三角フラスコに行って、「じゃあ出てみる？」って言われて、「はい」つって、三角フラスコに入らせてもらってっていう感じですね。

で、あと1個良かったのは、ルコック国際演劇学校。名前が夏の学校って変わる前ですね。だから、ルコック国際演劇学校の、たぶん2010年か2009年度に、SENDAI 座辞めたあと通いながら三角フラスコにも所属して、で、なぜか反骨心だけはあって、なんか先輩たちはダメだみたいな、このままだと良くないみたいなので、いろいろ考えている時に、大学生演劇の情報網に、澤野っていうすごい奴がいるらしいんですよって後輩から教えてもらって、会ってみたいねっていう話をして。で、エコエネっていう大学生がプロデュース公演やるのあったんですよ、その当時。1年に1回。で、それってだいたい演劇部でちょっと飛び抜けた子が引っ張られて、おむらいすの人の演出受けてみたい、それを企画してた東北電力の人でヤマキさんという女の方がいたんですけど、その人も俺のこと気に入ってくれて、澤野っていうすごい奴もいるんだっていうので、ちょっと引き合わせてやるから飲んでみなよみたいなことを言ってくれて、澤野と2人で飲んで、俺がめっちゃ、「先輩はクソだ」みたいな言いまくって、「じゃあ僕たちでなんかやりましょう」「ぜひぜひ」みたいな形になって。で、一緒に若伊達プロジェクトとかC.T.T.SENDAIだとか、つるんでやるようになりましたね。大学卒業して演劇やる感じではそんなとこですね。2010年ぐらいまではそんなです。

大河原：いろいろお話を伺ったうえでお聞きしたいのが、なんで演劇を続けているんですか。

小濱：半分意地ですね。意地だな。夢に出ることもあるか。例えば、声優学校で教えている子たちがどんどんデビューして。で、10年ぐらい前から、なんか仙

台出身の声優多くね？ とかなったら面白いなとか。現に教えてる子たち、がんが受かるとか、そういうことが起き始めたので。めぐり合わせの運が良かったっていうのもあるけど。なんかそういうことを増えてって、いい10年後出たら面白いなとか。20年後までの視野は持てないからな。5年、10年先でどう手を打つかみたいなことだけど。他人にどう思われようが、10年後になんかつながる手を打っていかうかなみたいなの。とか。

なんで続けてるのかか。まあ、ほかにできること、ないっすね。料理とか作っておいしいって言われて、お店出せばって言われるけど、出したいかと言われたら出したくないし。なんで、好きでもないやつのためにご飯作んなきゃいけないのみたいな。ですね。犬の面倒と演劇ぐらいかな。だからだと思います。できることが。38ぐらいなるとさ、もう引き返せないじゃないですか。いや、引き返せるのかもしれないけど、僕が引き返せないなって思っちゃってるから。あと、そうね、がんじがらめになっていることも多いような気がするな。澤野も隆も死んだ。サバイバーズギルトだ、行くぜみたいなの。あいつらは頼りにならない、じゃあ誰を頼りにするっつって。

大河原：いっぱい小濱さんのことを知れたような知れなかったような、不思議な感覚なんですけど、僕は。